

博士論文要約

発達障害児をもつ母親の精神的健康

－選択理論における基本的欲求と内的コントロールの観点から－

Mental Health of Mothers of Children with Developmental Disabilities :
From the Perspective of Basic Needs and Internal Control in Choice Theory

2021（令和3）年度

大阪総合保育大学大学院児童保育研究科児童保育専攻

藤井 清美

I. 論文構成

| | |
|---------------------------------------------------------------|--|
| 序章 | |
| 第1章 研究の背景 | |
| 第1節 発達障害児をもつ母親の精神的不健康 | |
| 1. 発達障害児をもつ母親の精神的不健康の要因 | |
| 2. 発達障害児をもつ母親の精神的健康課題 | |
| 第2節 基本的欲求と健康 | |
| 1. Maslow の階層性の基本的欲求と精神的健康 | |
| 2. 選択理論と精神的健康 | |
| 第3節 選択理論の基本的欲求と Maslow の基本的欲求および自己決定理論の 基本的心理欲求との相違点 | |
| 1. Maslow の基本的欲求と Glasser の基本的欲求 | |
| 2. 自己決定理論の基本的心理欲求と選択理論の基本的欲求 | |
| 第4節 選択理論からの発達障害児をもつ母親の精神的健康への支援の可能性 | |
| 第5節 本研究の目的 | |
| 第2章 自閉症スペクトラム障害児の母親の主観的な基本的欲求に関する研究 | |
| 第1節 問題の所在と研究目的 | |
| 第2節 調査方法 | |
| 1. 用語の定義 | |
| 2. 研究デザイン | |
| 3. 研究協力者 | |
| 4. 研究期間 | |
| 5. データ収集方法 | |
| 6. 分析方法 | |
| 7. 倫理的配慮 | |
| 第3節 調査結果 | |
| 1. 研究協力者の概要 | |
| 2. 基本的欲求が満たされている状況 | |
| 3. 基本的欲求が満たされていない状況 | |
| 第4節 考察 | |

| | |
|------------------------------------------------------------|--|
| 1. ASD 児をもつ母親の主観的な基本的欲求の満たされている状況と欲求間の関係..... | |
| 2. ASD 児をもつ母親の主観的な基本的欲求が満たされていない状況と欲求間の関係..... | |
| 3. ASD 児をもつ母親の基本的欲求が満たされにくい誘因..... | |
| 第 5 節 結論..... | |
| 第 6 節 本調査の限界と課題..... | |
| 第 3 章 就学前の子どもをもつ母親の基本的欲求と内的コントロール、育児困難感に関する調査..... | |
| 第 1 節 問題の所在と調査目的..... | |
| 第 2 節 調査方法..... | |
| 1. 研究デザイン..... | |
| 2. 研究対象者..... | |
| 3. 実施期間..... | |
| 4. 実施方法..... | |
| 第 3 節 結果..... | |
| 1. 研究協力者（母親）の属性及びその子どもの特徴..... | |
| 2. 定型発達児の母親と発達障害児の母親の各尺度項目の比較..... | |
| 3. 各尺度の因子構造の検討..... | |
| 4. 定型発達児の母親と発達障害児の母親の各尺度平均値..... | |
| 5. 定型発達児の母親と発達障害児の母親の各因子間の相関関係..... | |
| 6. 定型発達児の母親と発達障害児の母親における基本的欲求と内的コントロールと育児困難感との関連..... | |
| 7. 定型発達児の母親と発達障害児の母親における基本的欲求と内的コントロールが育児困難感に及ぼす影響の違い..... | |
| 第 4 節 考察..... | |
| 1. 定型発達児の母親と発達障害児の母親における各尺度項目の比較..... | |
| 2. 尺度の構成と意義..... | |
| 3. 定型発達児の母親と発達障害児の母親における 8 尺度の比較..... | |

| | |
|--------------------------------------------------------------|--|
| 4. 定型発達児の母親と発達障害児の母親の基本的欲求と内的コントロール、 育児困難感の関連と影響について..... | |
| 第5節 結論..... | |
| 第4章 選択理論による発達障害児の母親の精神的健康に関する提言..... | |
| 第1節 子育て期にある母親の基本的欲求について..... | |
| 第2節 選択理論からの発達障害児の母親の精神的健康への提言..... | |
| 1. 発達障害児をもつ母親の基本的欲求を満たすための支援の糸口..... | |
| 2. 発達障害児をもつ母親の基本的欲求と精神的健康..... | |
| 3. 選択理論における発達障害児の母親の精神的不健康への予防の糸口..... | |
| 4. 発達障害児の母親の精神的健康への支援の課題..... | |
| 5. 選択理論からの発達障害児の母親の精神的健康への提言..... | |
| 終章 総合的考察..... | |
| 第1節 総括..... | |
| 1. 選択理論における発達障害児の母親の基本的欲求の明確化..... | |
| 2. 発達障害児を育てる母親の精神的健康における選択理論の有効性..... | |
| 3. 発達障害児を育てる母親への支援..... | |
| 第2節 本研究の意義..... | |
| 第3節 本研究の課題..... | |
| 引用文献..... | |

Ⅱ．論文要旨

序章

本邦では、発達障害者支援法が2005（平成17）年に施行されて以来、発達障害児・者への関心が高まり、当事者のみならず、家族への支援も広まりつつある（中村, 2011）。しかしながら、超少子化、核家族化が進み、祖父母および社会のサポートが得られないなか、家庭内での人間関係が希薄となり、母親の孤立感が高まっている。

母親の孤立感は育児ストレスや育児不安を高め、母親の深刻な精神的問題に発展しやすく、子どもへの虐待など不適切な育児行動を助長しかねない（Abidin, R., 1990）。

筆者自身、一人の子の母親として、子育てに苦悩した一人である。幼少期より育てにくさを感じながら、言うことを聞かない子どもの行動に苛立ちを抱え、日々の生活のなかで知らず知らずのうちに自分の心の負担や不調に気づかず、必要以上に叱責をするなど否定的な養育態度をとっていたことがあった。そのようなとき、Glasser（William Glasser, 1925 - 2013）の選択理論心理学（Choice Theory Psychology 以下、選択理論と記す）に出逢い、人には5つの基本的欲求（basic needs）「愛・所属（love, loving sex, and belonging）、力（power）、自由（freedom）、楽しみ（fun）、生存（survival）」があり、それぞれの欲求を満たすことが精神的健康につながることを知った。そして選択理論では、この5つの欲求のなかでも最も愛・所属の欲求を満たすことを推奨しており、それには子どもとの良好な人間関係が必要であることを知ることになる。また、選択理論において、強要する、強制する、罰する、報酬を与える、操る、やる気にさせる、批判する、責める、文句を言う、口うるさく言うなどの人間関係を壊す習慣を手放すことであった。同時に子どもとの関係には、気遣う、傾聴する、サポートする、交渉する、励ます、愛する、仲良くする、信頼する、受け入れる、歓迎する、尊敬する、などの人間関係を築く習慣に変えることであった（Glasser, 1998, p.20）。その後、選択理論のセミナーで子どもの上質世界（quality worlds）^{注1）}に自分を入れてもらうこと、また子どもの欲求を満たす邪魔をしないで、むしろ子どもの欲求を満たす手伝いをしながら、自分の欲求を充足させる（柿谷, 2009）ことの重要性を知ることになる。自分の思い通りに動かない子どもの行動に

注1) 上質世界（quality worlds）とは、私たちの欲求を最も満足させ、気分を良くしてくれると判断した人や物、状況、信仰などを写真のように描き、イメージしているところである。または、その人が願っている状況、事柄も含む（Glasser, 1998 p.45）。

一喜一憂していた私だったが、選択理論を知ることによって自分の行動の変化とともに心の負担感が軽くなっていたことに気づかされた。

発達障害児をもつ母親は、子どもの行動特性であるコミュニケーションの障害や社会的な関係性の障害などにより、健常児の母親の育児ストレスよりも大きいことはすでに周知のことである（刀根, 2002；庄司, 2007；大橋・谷向・加藤, 2018）。

これまで、発達障害児をもつ親への支援には主に二つあり、一つは子どもの障害に関する内容や相談機関に関する情報提供である。もう一つは子どもへの関わり方などのペアレントトレーニングであった（中村, 2011）。それらは子どもを中心とした支援であり、養育者となる母親は献身的に療育に取り組むことが期待され、自分の生活または人生をも犠牲にし、疲弊していることがある。また、母親はペアレントトレーニングを受けたあとも、子どもの問題に直面した場合、怒りや抑うつが喚起され、習得した対処行動が機能的に遂行されないことを指摘している（宮澤・小関真実・小関俊祐, 2012）。そのため、子どもを含めた家族を中心とした支援が昨今の課題である。

小児看護において、看護職は発達過程にある子どもと、その家族にも目を向け、家族が健やかに生活できるよう、支援することも課せられている。精神的な健康を崩しやすい発達障害児をもつ子どもの母親において、母親自身が健康で自分らしく生活できるためには、ヘルスプロモーションの理念のもと、身体的な健康に並んで、自らで精神的健康を保持増進できる支援が必要である。

第1章より、発達障害児をもつ母親の精神的健康課題について概観し、精神的健康と選択理論を中心とした基本的欲求について説明する。

第1章 研究の背景の概要

第1章では、発達障害児の母親の精神的健康課題から選択理論における母親の精神的健康への支援の可能性について、先行研究から考察した。発達障害児の母親の精神的問題は、子どもの行動特性が直接の要因ではなく、母親自身の育児困難感という認知的な要素が育児不安や抑うつに関連しており、精神的な不健康を生じていた。母親自身に関わる育児ストレスが、家族機能やQOLに子どもの特徴に関わるストレスよりもネガティブに影響していたことから、母親自身に関する育児ストレスに向けての介入が必要であった。そのため、母親が子育てを肯定的に捉えられるような認知的変化を促す支援が必要であ

り、母親としての自信のなさなど、母親が抱えている否定的な感覚が根底にあり、育児困難感に着目した。

次に、精神的不健康に陥りやすい発達障害児の母親について、母親の精神的健康への支援の可能性を選択理論における基本的欲求の観点から考察した。選択理論の提唱者である Glasser は精神的健康と基本的欲求について言及しており、5つの基本的欲求の愛・所属、力、自由、楽しみ、生存の欲求を満たすことが精神的健康にとり重要であることを指摘している。そのなかでも愛・所属の欲求を満たすことを重要とし、愛・所属の欲求を満たすためには、身近な人との人間関係を良好にすることを推奨した。また、Maslow の階層性の基本的欲求と Deci らの自己決定理論の基本的心理欲求からも検討した。しかしながら、Maslow の基本的欲求は生理的の欲求が高いことと、Deci らの基本的心理欲求には、自由と楽しみの欲求に類似する欲求が含まれず、母親を社会的存在の生活者として捉えるならば、自由と楽しみの欲求は欠かせないものであると考え、選択理論の基本的欲求に注目することにした。さらに、選択理論では、人は外側からの刺激によって反応し、行動を起こすのではなく、人は内側から動機づけられて行動を起こすとしている。その内側から動機づけられているのが、5つの基本的欲求であり、人間関係において欲求充足を図る際、他者よりも自分をコントロールすることを勧めている。育児困難感に陥りやすい発達障害児の母親が自らをコントロールし、基本的欲求を充足させることは、育児困難感の緩和に繋がり、精神的健康への一助になることの示唆を得た。

そこで、第5節では、本研究の目的を3つ列挙した。

第一に、自閉症スペクトラム障害児をもつ母親のインタビューから、選択理論の基本的欲求に依拠し、母親は何をどのように満たしているのか、または満たされていないのか、それらの状況を明らかにし、欲求間の様相と満たされにくい要因を考察する。

第二に、定型発達児と発達障害児の母親を対象とした質問紙調査から、母親の基本的欲求についての構造と欲求間の関連を明らかにする。

第三に、母親の基本的欲求と対人関係の様相をあらわす内的コントロールと育児困難感との関連を明らかにし、発達障害児の母親と定型発達児の母親と比較し、発達障害児をもつ母親の精神的健康への支援の示唆を得る。

第2章 自閉症スペクトラム障害児の母親の主観的な基本的欲求に関する研究の概要

第2章では、障害児のなかでも最も母親のストレスが高い自閉症スペクトラム障害児（Autism Spectrum Disorder：ASD 以下、ASD 児と記す）の母親10名を対象に、半構成的面接を行い、得られたデータを質的帰納的に分析した。分析においては、選択理論の5つの基本的欲求に依拠し、母親の主観的な基本的欲求の状況を明らかにし、その欲求間の関係について考察をした。その結果、ASD 児をもつ母親の主観的な基本的欲求が満たされている状況には、生存の欲求の『体調が良好である』、愛・所属の欲求の『身近な人が心の拠り所である』、自由と楽しみの欲求の『自由に楽しむ時間がある』、力の欲求の『自己肯定感が高い』があった。母親の主観的な基本的欲求が満たされていない状況では、生存の欲求の『子育てによる心身の健康のゆらぎ』、愛・所属の欲求の『身近な人との信頼関係への不満』、自由と楽しみの欲求の『自由に楽しむ時間の不足』、力の欲求の『自己肯定感の低さ』があった。基本的欲求が満たされている状況と満たされていない状況の欲求間の関係からも、愛・所属の欲求は、力、自由、楽しみ、生存の欲求に関係していたため、愛・所属の欲求が満たされないと他の欲求も満たされにくい状況であった。また、自由と楽しみの欲求は生存の欲求にも関係していたため、身体的健康を維持するためにも自由と楽しみの欲求を満たすことも重要であった。ASD 児の母親が生き生きと自分らしく心地よく生活を送るためには、満たされている状況と同様、良好な人間関係を構築し、愛・所属の欲求が満たされることが最も重要であった。また、母親が愛・所属の欲求を満たすためには、子どもの障害受容を共有できる夫をはじめ、信頼できる人が必要であった。

第3章 就学前の子どもをもつ母親の基本的欲求と内的コントロール、育児困難感に関する調査の概要

第3章では、就学前の定型発達児の母親293名と発達障害児の母親94名、合計387名を対象に、選択理論の5つの基本的欲求（愛・所属、力、自由、楽しみ、生存）と内的コントロール、育児困難感、抑うつについて、質問紙で調査を行った。3つの尺度から得られたデータをそれぞれに探索的因子分析を行い、その後得られた因子の項目を確認的因子分析で適合度を確認した。結果、基本的欲求は2因子、内的コントロールは3因子、育児困難感、抑うつについては3因子が抽出された。因子分析で抽出された基本的欲求の2因子と内的コントロールの3因子と育児困難感、抑うつの3因子を定型発達児の母親群と発達障

害児の母親群を対象に、多母集団同時分析を行い、比較検討をした結果、基本的欲求と内的コントロールと育児困難感との関連に違いがあった。

第4章 選択理論による発達障害児の母親の精神的健康に関する提言の概要

第4章では、発達障害の子どもをもつ母親の精神的健康について、第2章と第3章から得られた結果を選択理論の観点から考察をした。第2章と第3章の結果から、母親は4つの心理的欲求（愛・所属、力、自由、楽しみ）が満たされることで、育児困難感も抑うつ傾向も緩和し、精神的健康の保持と子育てへの動機づけが期待できることが示唆された。母親において、基本的欲求の充足には、家族との人間関係が大きく関与していたため、人間関係を構築するための自らの行動を統制する内的コントロール力を身につけることの重要性が明らかになった。また、母親にとって、良き理解者である専門職との出会いは、否定的に捉えやすい子育てを肯定的に変換させる機会であり、愛・所属と力の欲求を満たす転機でもあった。以上より、欲求充足のためのスキルを促進させるヘルスプロモーション支援のプログラム構築への示唆を得た。

終章 総合的考察の概要

終章では、発達障害児を育てる母親への支援には、母親だけでなく、その家族が孤立することなく、社会、地域が支えていくことの重要性とともに、選択理論の観点から母親の健康教育への必要性を論じた。本研究における今後の課題は、発達障害児をもつ母親の健康教育を主体とした支援プログラムを構築し、実践しつつ、プログラムの有効性を検証していくことである。

Ⅲ. 引用文献

Abidin, R. (1990). *Parenting stress index manual third ed.* Pediatric Psychology Press.

Charlottesville, V A.

浅野 みどり・古澤 亜矢子・大橋 美幸・吉田 久美子・門間 晶子・山本 真実. (2011). 自閉症スペクトラム障害の幼児をもつ母親の育児ストレス、子どもの行動特性、家族機能、QOLの現状とその関連. 家族看護学研究, 1 (3), 157-168.

Alderfer, C. P. (1969). *An Empirical Test of a New Theory of Human Needs*.

Organizational behavior and human performance, 4, 142-175.

- Deci, E. L. & Flaste, R. (1995) / 桜井茂男 訳. (1999). 人を伸ばす力 内発と自律のすすめ, 新曜社：東京.
- 藤井 清美. (2018). グラッサーの選択理論の日本での展開：良好な母子関係育成に向けて、姫路大学看護学部紀要, **10**, 1-12.
- 藤原 善美. (2012). 基本的欲求間の関係と目標内容に関する展望：自己決定理論研究における概観. 信州豊南短期大学紀要, (29), 71-97.
- Glasser, W. (1965). *Reality Therapy : A new approach to psychiatry*, Harper Collins Publishers, USA. / 真行寺 功 訳 (1975) . 現実療法：精神医学の新しいアプローチ, サイマル出版：東京.
- Glasser, W. (1984). *Take Effective Control of Your Life*, / 堀 たお子 訳 (1985). 人生はセルフ・コントロール：落ちこまないための現実療法, サイマル出版：東京.
- Glasser, W. (1985). *Control Theory : A new explanation of how we control our lives* (Originally published as take effective control of your life) , Harper & Row, Publishers, New York.
- Glasser, W. (1998) . *Choice Theory : A new psychology of personal freedom*, Harper Collins Publishers, Inc. , USA. / 柿谷 正期 訳 (2000). グラッサーの選択理論：幸せな人間関係を築くために, アチーブメント：東京.
- Gasseer, W. (2011). *Take Charge of Your Life : How to Get What You Needs with Choice Theory Psychology*. iUniver, USA. / 柿谷 正期 訳 (2016). テイクチャージ：選択理論で人生の舵を取る, アチーブメント：東京.
- Goble, Frank G. (1970). *The Third Force : The Psychogy of Adraham Maslow*. / 小口 忠彦 訳 (1972). マズローの心理学 (初版) , 産業能率大学出版部：東京.
- 原口 英之・上野 茜・丹治 敬之・野呂 文行. (2012). 我が国における発達障害にある子どもの親に対するペアレントトレーニングの現状と課題：効果評価の観点から. 行動分析学研究, **27** (2), 104-127.
- 芳賀 彰子・久保 千春. (2006). 注意欠陥/多動性障害、広汎性発達障害児をもつ母親の不安・うつに関する心身医学的検討. 心身医学, **46** (1), 75-86.
- 芳賀 彰子. (2009). 知的障害を伴わない発達障害児の養育環境とその管理：父母における心身の健康状態と心理社会的治療介入の必要性. 子どもの心とからだ, **18** (2), 266-275.

- 井田 歩美. (2013). わが国における「母親の育児困難感」の概念分析：Rodgers の概念分析を用いて. ヒューマンケア研究学会誌, **4** (2), 23-30.
- 今西 良輔. (2013). 発達障害児を育てる父親の生活体験：3 人の父親と息子達の歩み. 北海道医療大学看護福祉学部学会誌, **9** (1), 27-34.
- 稲浪 正充・西 信高・小椋 たみ子. (1980). 障害児の母親の心的態度について. 特殊教育学研究, **18** (3), 33-41.
- 石原 理津子・北川 かほる. (2004). 幼児をもつ母親の育児不安について：母親と父親を対象にした調査より. 日本看護福祉学会, **10** (1), 92-93.
- 伊藤 信寿・石附 智奈美. (2018). ペアレントトレーニングにおける母親の子どもに対する認識の変化について. 作業療法, **37** (1), 57-66.
- 柿谷 正期. (2009). リアリティセラピー集中基礎講座 ワークブック, NPO 日本リアリティセラピー協会, p.7.
- 柿谷 正期・井上 千代. (2011). 選択理論を学校に：クオリティ・スクールの実現に向けて（初版）, ほんの森出版：東京.
- 数井 みゆき・無藤 隆・園田菜摘. (1996). 子どもの発達と母子関係・夫婦関係－幼児を持つ家族について－, 発達心理学研究, (1), 31-40.
- 加藤 星花・角本 淳子・森田 牧子・山村 礎. (2013). 軽度発達障害児・者を持つ父親のストレスと抑うつとの関連：子どものとの関わりを通して. 第 20 回日本保健科学学会学術集会（日本保健科学学会誌）, **13**, p.46.
- 川井 尚・庄司 順一・千賀 悠子・加藤 博仁・中野 恵美子・恒次 欽也. (1995). 育児不安に関する臨床的研究Ⅱ：育児不安の本態としての育児困難感について. 日本総合愛育研究所紀要, **32**, 29-47.
- 川井 尚・庄司 順一・千賀 悠子・加藤 博仁・中村 敬・谷口 和加子・恒次 欽也・安藤 朗子. (1997). 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ：育児困難感プロフィール評定質問紙の作成. 日本総合愛育研究所紀要, **34**, 93-111.
- 川井 尚・庄司 順一・千賀 悠子・加藤 博仁・中村 敬・谷口 和加子・恒次 欽也・安藤 朗子. (1998). 育児不安に関する臨床的研究Ⅴ：育児困難感プロフィール評定質問紙の作成. 日本総合愛育研究所紀要, **35**, 109-143.

- 川村 千恵子・田辺 昌吾・畠中 宗一. (2010). 乳幼児をもつ母親のウェルビーイングに影響を及ぼす要因：属性, 子育て支援ニーズならびに充足度からの検討. メンタルヘルスの社会学, **16**, 42-52.
- 木村 直子・畠中 宗一. (2005). 「子どものウェルビーイング」尺度作成に関する研究. メンタルヘルスの社会学, **11**, 60-70.
- 小暮 陽介・阿部 美穂子・水内 豊和. (2007). グループペアレント・トレーニングプログラムの効果についての検討：教育センターにおける実践から. 人間発達科学部紀要, **2** (1), 137-144.
- 厚生労働省 a. (2020). 健康日本 21（休養・こころの健康）,
https://www.mhlw.go.jp/www1/topics/kenko21_11/b3.html, 2020 年 9 月 13 日検索.
- 厚生労働省 b. (2020). 令和 2 年版厚生労働白書－令和時代の社会保障と働き方を考える；図表 1-1-10 出生順位別にみた母の平均年齢の推移.
<https://www.mhlw.go.jp/stf/wp/hakusyo/kousei/19/backdata/01-01-01-10.html>.
2021 年 10 月 14 日検索.
- 厚生労働省 c. (2020). 2019 年国民生活基礎調査の概要；世帯構造及び世帯累計の状況. p.3. <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf>.
2021 年 10 月 14 日検索.
- 厚生労働省 d. (2020). 2019 年国民生活基礎調査の概要；表 6 児童のいる世帯における母の仕事の状況の年次推移. p.8.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa19/dl/14.pdf>.
2021 年 10 月 14 日検索.
- 厚生労働省 e. (2020). 令和元年(2019)人口動態統計月報年計（概数）の概況；合計特殊出生率について.
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai19/dl/tfr.pdf>.
2021 年 10 月 14 日検索.
- 厚生労働省. (2021). 子ども・子育て児童虐待防止対策：令和 2 年度児童相談所での児童虐待相談対応件数（速報値）.
https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/index.html. 2021 年 10 月 14 日検索.

- 工藤 智・柿谷 正期. (2009). 内的コントロール尺度の作成. 選択理論心理学研究, **11** (1), 67-88.
- 桑田 左絵・神尾 陽. (2004). 発達障害児をもつ親の障害受容過程：文献的検討から. 児童青年精神医学とその近接領域, **45**(4), 325-343.
- Mcleod, Saul. (2020). Simply Psychology : Maslow's Hierarchy of Needs.
<https://www.simplypsychology.org/maslow.html>. 2021 年 11 月 15 日検索.
- Maslow, Abraham H. (1970a). *Motivation and Personality, second edition*, Harper & Row. /
- 小口忠彦 訳 (1987). 改定新版 人間性の心理学：モチベーションとパーソナリティ (17). 産業能率大学出版部：東京.
- Maslow, Abraham H. (1970b). *Motivation and Personality*, Harper & Row : New York.
- Maslow, Abraham H. (1970c). *Religions, values, and peak experiences*, New York : Penguin. (Original work published 1966).
- 松岡 純子・玉木 敦子・初田 真人・西池 絵衣子. (2013). 広汎性発達障害児をもつ母親が体験して困難と心理的支援. 日本科学学会誌, **33** (2), 12-20.
- 文部科学省 (2016). 発達障害者支援法の一部改正する法律の施行について,
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/main/1377400.htm, 2018 年 1 月 14 日検索.
- 道原 里奈・岩元 澄子. (2012). 発達障害児をもつ母親の抑うつに関連する要因の研究：子どもと母親の属性とソーシャルサポートに着目して. 久留米大学心理学研究, **11**, 74-83.
- 三浦 香織. (1997). 発達障害児の父親の子育てに関する事例研究：自閉症幼児 2 例. 東京都立医療技術短期大学紀要, (10), 243-247.
- 宮本 政子・船越 和代・中添 和代・時岡 恵美・森 美代子・渋谷 幸彦. (2000). 乳幼児を持つ母親の育児不安の現状とその要因. 香川県立医療短期大学紀要, **2**, 115-121.
- 宮澤 翔平・小関 真実・小関 俊祐. (2012). ペアレントトレーニングにおける強化随伴性の手続きと認知的再体制化の手続きの有効性の比較. 愛知教育大学教育臨床総合センター紀要, (2), 45-51.
- 本山 和恵・松阪 哲應・長岡 珠緒・松尾 光弘. (2012). 発達障害児の養育に困難感を抱く母親に対するペアレントトレーニングの効果. 脳と発達, **44**, 289-294.

- 森口 香・岩満 優美・山本 健司・金生 由紀子・中村 賢・井上 勝夫・他. (2008). 広汎性発達障害の子どもをもつ母親のソーシャルサポートの検討. ストレス科学, **23** (1), 104-114.
- 永井 洋子, 林 弥生. (2004). 広汎性発達障害の診断と告知をめぐる家族支援. 発達障害研究, **26**, 143-142.
- 永田 雅子・佐野 さやか. (2013). 自閉症スペクトラム障害が疑われる 2 歳児の母親の精神的健康と育児ストレスの検討. 小児の精神と神経, **53** (3), 203-209.
- 内閣府. (2013). 平成 25 年度少子化社会対策白書, 勝美印刷, 25-30, 東京.
- 中村 志津子. (2011). 発達障害児・者をもつ家族における支援の現状. 広島大学大学院心理臨床教育研究センター紀要, **10**, 86-99.
- 中島 義明・安藤 清志・子安 増生・坂野 雄二・繁榎 算男・立花 政夫・他. (2005). 心理学辞典 (11). 有斐閣：東京.
- 中塚 善次郎. (1984). 障害児をもつ母親のストレスの構造, 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **33**, 27-40.
- 中塚 善次郎. (1985). 障害児をもつ母親のストレスの構造 (II), 和歌山大学教育学部紀要 教育科学, **34**, 27-40.
- 日本 WHO 協会 訳 (1947). 健康の定義,
<https://japan-who.or.jp/about/who-what/identification-health/>, 2020 年 9 月 9 日検索.
- 日本健康教育学会 (2021). 日本健康教育学会が考える：ヘルスプロモーション
<http://nkgg.eiyo.ac.jp/hehp.html>, 2021 年 11 月 18 日検索.
- 新美 明夫・植村 勝彦. (1980). 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて：ストレスの尺度の構造, 特殊教育学研究, **18** (2), 18-32.
- 野邑 健二・辻井 正次. (2006). アスペルガー症候群の母親の抑うつについて、厚生労働科学研究費助成金（こころの健康科学研究事業）分担報告書, 平成 18 年度総括・分担研究報告書, 63-67.
- 野邑 健二・金子 一史・本城 秀次・吉川 徹・石川 美都里・松岡 弥玲, 辻井 正次. (2010). 高機能広汎性発達障害児の母親の抑うつについて. 小児の精神と神経, **50** (4), 429-438.

- 野村 智実. (2017). 自閉症スペクトラム障害のある子どもをもつ父親への支援. 小児看護, **40** (4), 493-495.
- 小椋 たみ子・西 信高・稲浪 正充. (1980). 障害児をもつ母親の心的ストレスに関する研究 (Ⅱ). 島根大学教育学部紀要 (人文社会科学), **14**, 57-74.
- 及川 恵. (2003). 気晴らしの情動調節プロセス：効果的な活用に向けて. 教育心理学研究, **51**, 443-456.
- 大橋 優・谷向 みつえ・加藤 美朗. (2018). 学齢期発達障害児の母親の子育てストレス尺度の作成, 日本心理学会第 82 回大会発表論文集, p.816.
- 岡野 維新・武井 祐子・寺崎 正治. (2012). 広汎性発達障害児をもつ母親の育児ストレスサーと父親の母親に対するサポート. 川崎医療福祉学会誌, **21** (2), 218-224.
- Roy, J., (2014). *William Glasser : Champion of choice*. Zeib, Tucker & Theisen Tnc. / 柿谷正期 訳. (2015). ウィリアム・グラッサー：選択理論への歩み. アチーブメント：東京.
- Ryan,R.M. & Deci,E.L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, well-being. *American Psychologist*, **55**, 68-78.
- 坂口 美幸・別府 哲. (2007). 就学前の自閉症児をもつ母親のストレスサーの構造. 特殊教育研究, **45**(2), 127-136.
- Saldaña, J. (2016). *The coding manual for qualitative researchers. 3rd ed.* London. Sage.
- 酒井 和香・村上 理絵・南 恭子. (2019). 自閉症児の母親が感じる心的負担に関する先行研究の概観. 特別支援教育実践センター研究紀要, (17), 1-9.
- 佐藤 正恵・植田映美・小川香織. (2010). ADHD 児の保護者に対するペアレント・トレーニングの有効性について. アルテス リベラレス (岩手大学人文社会科学部紀要), **86**, 27-40.
- 清水 嘉子. (2003). 母親の育児に対する信念と育児ストレスの関係, 小児保健研究, **62** (5), 558-568.
- 清水 嘉子. (2006). 父親の育児ストレスの実態に関する研究, 小児保健研究, **65** (1). 26-34.
- 庄司 妃佐. (2007). 軽度発達障害が早期に疑われる子どもをもつ親の育児不安調査. 発達障害研究, **29** (5), 349-358.

- 鈴木 裕美・依田 健志・西田 尚樹・神田 かなえ・平尾 智宏. (2016). 香川県における子育て支援プログラム導入の試み：前向き子育てプログラム（トリプルP）の有効性の検討. 地域環境保健福祉研究, **19**(1), 25-32.
- 篁 倫子・小嶋 美奈子・小林智子・田上友里加. (2017). 発達障害の子どもの母親のエンパワメントと支援：ストレスマネジメントを取り入れたペアレントトレーニングの実践. お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要, **19**, 91-97.
- 谷津 裕子. (2015). Start Up 質的看護研究 (第2版), 学研, pp.129-143. : 東京.
- 寺園 さおり. (2019). 子育て期の母親の育児行動に対する基本的心理欲求充足と動機づけとの関連. 小児保健研究, **78** (1), 33-40.
- 富尾 則子・渕上 達夫・後藤 沙羅・笹川 彩・佐藤 菜穂・恵良 美津子・他. (2018). 広汎性発達障害児に対するソーシャルスキルトレーニングとその保護者に対するペアレントトレーニングによる効果の検討. 子の心とからだ, **27** (1), 24-32.
- 友田 明美. (2012). 新版 いやされない傷：児童虐待と傷ついていく脳. 診断と治療社, pp. 86-93 : 東京.
- 刀根 洋子. (2002). 発達障害児の母親の QOL と育児ストレス－健常児の母親との比較－. 日本赤十字短期大学紀要, **15**, 17-23.
- 蓬郷 さなえ・中塚 善次郎・藤居 真路. (1987). 障害児をもつ母親のストレスの構造 (I)：子どもの年齢、性別、障害種別要因の検討, 鳴門教育大学学校教育研究センター紀要, **1**, 39-47.
- 蓬郷 さなえ・中塚 善次郎. (1989). 障害児をもつ母親のストレスの構造 (II)：社会関係認知とストレス, 小児の精神と神経, **29**, (1, 2), 97-107.
- 植村 勝彦・新美 明夫. (1981). 心身障害幼児をもつ母親のストレスについて：ストレスの構造, 特殊教育学研究, **18** (4), 59-69.
- 渡部 奈緒・岩永 竜一郎・鷺田 孝保. (2002). 発達障害幼児の母親の育児ストレスおよび疲労感：運動発達障害児と対人・知的障害児の比較. 小児保健研究, **61** (4), 553-560.
- 渡辺 弥生・石井 睦子. (2005). 母親の育児不安に影響を及ぼす要因について. 法制大学文学部紀要, **51**, 25-39.
- WHO (2005). /日本ヘルスプロモーション学会. ヘルスプロモーションとは,
<http://plaza.umin.ac.jp/~jshp-gakkai/intro.html>, 2021 年 11 月 18 日検索.

- 山田 陽子. (2010). 療育機関に通う自閉症スペクトラム児をもつ母親の育児ストレスに関する研究. 川崎医療福祉学会誌, **20** (1), 165-178.
- 山根 隆宏. (2013). 発達障害児・者をもつ親のストレッサー尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 心理学研究, **83** (6), 556-565,
- 山根 隆宏. (2014). Benefit finding が発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応に与える効果. 心理学研究, **85** (4), 335-344.
- 山根 隆宏. (2015). 発達障害児・者の母親の心理的ストレス反応過程に対する意味了解の影響, **86** (4), 293-301.
- 吉田 弘道. (2012). 育児不安研究の現状と課題. 専修人間科学論集, 心理学編, **2** (1), 1-8.
- 吉崎 聡子・平岡 恭一. (2017). バランスのとれた基本的心理欲求充足の検討. 日本教育心理学会第 59 回総会発表論文集, p.389.